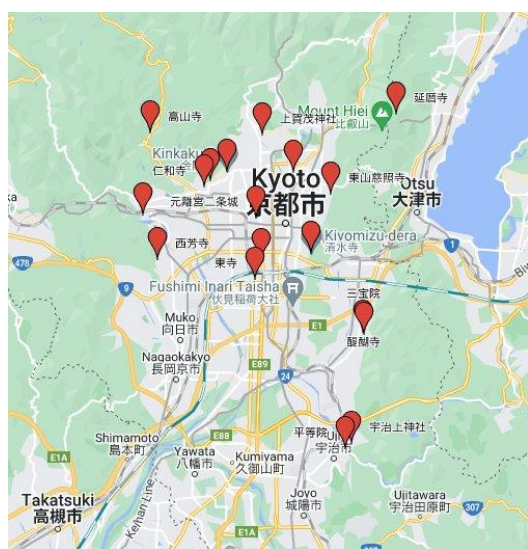


観光都市としての京都

子安 陽

(2020 年度入学 4 期生)

2020 年、世界人気都市ランキング第一位。2014 年、2015 年最も人気がある旅行先「ワールド・ベスト・シティ」二年連続第一位。これらはどちらも京都市の受賞歴である。これらはコンデ・ナスト・トラベラーというアメリカの大手旅行雑誌と、トラベル+レジャーという、雑誌の記事である。特にトラベル+レジャーはアメリカだけでなく世界的に読まれている雑誌であり、世界で最も影響があるといわれている。はっきり言ってこれらの記録は異常である。世界には多くの観光都市がある。ドバイ、ロンドン、パリ、ローマなど世界的に知名度があり、多くの人を魅了する都市があるにもかかわらず、それらを抑えて、京都がこのような記録を打ち立てる観光都市になったのはなぜなのか。その理由について以下で述べることにする。



初めになぜ、私がこのテーマで執筆に臨もうと思ったのか。その経緯から説明する。私は京都、特に観光都市としての京都が大好きなのだ。私が京都を愛してやまない大きな理由は、歴史的価値のある建造物やスポットを身近に感じられるからである。京都には実に 17 カ所もの世界遺産が存在している（左図参照）。また、それら一つ一つの距離が近いことも京都の特徴といえる。これは大変希少なことである。その気になれば全ての世界遺産を一日で回りきることも不可能ではない。また、それらの世界文化遺産のまわりに歴史的

価値を示す資料館や、趣のある街並み、カフェ、土産屋などがあり、京都の楽しみ方は、訪れる人にとって様々である。それゆえに個々に合った距離で、京都の町と触れ合うことが出来る。

京都がここまでの観光都市になれた理由として一つの仮説を立てた。それは、自然と建築物が調和していることではないだろうか。京都の主な観光スポットをいくつか想像してみてほしい。伏見稲荷大社、清水寺、嵐山、鴨川デルタなどが候補にあがる。そして、それら全てが自然と調和しているのだ。眼前に広がる美しい自然の中に、凜とたたずむ建築物が存在感を放っている。これが、京都にしかない価値と考える。例えば、フランスのエッフェル塔やインドのタージ・マハルなどは建築物としての価値はもちろんあるが、それは自然と調和しているものとはいえない。あくまでも建築物単体の価値である。また、ウユニ塩湖やエンジェルフォールなども有名な観光スポットではあるが、これもまた自然が生み出す風景としての価値しか持ち合わせていない。これらに対し、京都の観光スポットは自然と建築物の調和で成り立っている。さらに、日本には四季が存在している。このことにより、季節ごと異なる調和を楽しむことが出来る。繰り返しになるが、この自然と建築物の調和こそ京都がここまでの観光都市になったことの要因ではないかと考えた。



ここで、上記の仮説の裏付けとなる論文を紹介しようと思う。宮入真理子氏、仙田満氏、井上寿氏による「自然景観と建築形態の調和についての一考察」という論文である。この論文では主に、自然と調和する建築形態と、その風景に対して私達人間がどのように感じるかを扱っている。結論から言うと、自然と調和する建築形態は四角錐である。円錐、円柱、四角柱など様々な形態の建築物が、自然と共存している画像を被験者に見せ、どの形態の建築物に調和が生まれ、心地よいと感じるかについての調査をしている。その結果、最も自然と調和していて心地よいと感じる形態が四角錐だったのだ。そして、京都では、いたるところに四角錐の建築物と自然を同時に見ることが出来る。清水寺、

金閣寺、銀閣寺など、挙げればきりが無い。京都には四角錐の歴史的建造物が数多く存在し、そしてそれらが自然と調和している。偶然なのか必然なのかは定かではない。しかし、私たちの祖先は自然と調和する建築形態が四角錐であると本能的にわかっていたのではないだろうか。その調和が現代まで引き継がれ、人々の心に残る、心地よい景観を生み出す、最も大きな要因となっていると考える。

しかし近年、素晴らしい観光都市京都に暗雲が立ち込めている。新型コロナウイルスによる影響だ。観光都市の宿命といえるが、観光都市では産業の中心を観光に据えているため、京都市の経済の多くを観光業に頼ることになる。それゆえに、今回のような事態

（参考）観光客数等の独自推計※3			
区分	令和3年	令和2年	（参考）令和元年 京都観光総合調査結果
観光客数	2,102万人	2,519万人	5,352万人
観光消費額	4,457億円	4,535億円	1兆2,367億円
経済波及効果	4,885億円	4,980億円	1兆3,569億円

における打撃の大きさは計り知れない。実際の数値を参考に今回の事態の深刻さについて言及する。京都市の調査によると、令和元年度には5352万人いた観光客も令和二年には2519万人、令和三年度には2102万人と、実に半分以上となっている。

また、令和元年度には1兆2367億円あった観光消費額についても、

令和二年度には4535億円、令和三年度には4457億円と危機的な状況が続いている。まさに京都にとっては大打撃である。このような深刻な状況に対して、京都では安心安全に観光してもらうためのガイドライン「京都観光版ガイドライン」を定めている。そのほかにも、土産屋や飲食店などではネット販売が中心に展開しつつある。このようにすこしずつではあるものの、京都は時代に合った観光都市として生まれ変わりつつある。今後も観光都市として素晴らしい京都であり続けるために、どのような方向に進んでいくのか。このことに着目するのは非常に価値のあることではないだろうか。時代に合った観光の在り方の探求することで、これまでよりも多様な価値観を持ち、柔軟で力強い観光都市となることが出来る。また、私自身京都を心から愛し、京都で様々なことを学ぶ機会をいただいている一学生として、今後の京都のために出来ることを模索し続けようと思う。

最後に、少しでも京都の観光に興味を抱いていただけたようでしたら、是非一度京都に足をのばしてみたい。きっと今までとは少しだけ違った京都の良さに気づけるのではないだろうか。

参考文献

<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/375816>

<http://kyoto-daisakusen.jp>

<https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/page/0000299871.html>

「自然景観と建築形態の調和についての一考察」 宮入真理子、井上寿、仙田満